

熟議の民主主義

顧問

増田寛也



チュニジアの長期政権を打倒した「ジャスミン革命」の勢いは、またたく間に近隣のエジプトからバーレーンなど中東産油国に飛び火した。ジャスミンの甘い香りとは異なり、リビアではカダフィ政権と反政府側で、まさに血で血を洗う激烈な戦闘がくり広げられている。長期にわたる独裁体制と政治腐敗の打倒。フェイスブックなどインターネットを駆使した命懸けの政治行動と「民主化」を求める大衆エネルギーの壮大さには、圧倒される思いである。

日本では当り前のデモクラシーが、これらの国では影も形も存在すらしなかった。そして、このような国々が世界を見渡せば決して少なくない。このことは、民主化を問う以前に、まず貧困と闘わなくてはならない国々への国際的な支援の枠組みを早急に構築しなければならないことを物語っている。エネルギー・環境問題と南北問題の解決は21世紀の最優先課題である。

ところで、「民主制」と訳されるデモクラシーについて、今一度考えてみたい。啓蒙家ルソーは英国の議会制度について、「英国の人民は自由だと思っているが、それは大きな間違いだ。彼らが自由なのは議員を選挙する間だけのことで、議員が選ばれるやいなや、英国人は奴隷となり、無に帰してしまう」（『社会契約論』）と述べている。彼は人民主権による直接民主制を理想としているのである。しかし、現代国家では間接民主制を具現化した議会制民主主義（代表民主制）、すなわち「議会政治」が一般的である。米国の第4代大統領マディソンは、大衆を信頼せず衆

愚政治を懸念していたため、合衆国憲法の起草の際、代表民主制である共和制を導入したことで知られている。

結局、この問題の本質は大衆の能力をどう評価するかによっている。経済学者のシュンペーターも『資本主義・社会主義・民主主義』のなかで、「普通の人に合理的な政治的判断を期待することなどできない」とはっきり述べている。彼によると、デモクラシーとは政治家による政治のことであり、エリート主義の発現ということになる。

こうした考えは決して特別なものではなく、スペインの哲学者オルテガも『大衆の反逆』のなかで、不合理な感情によってゆれ動き、大勢に順応する大衆民主主義の危険性を指摘している。

最近、「熟議」という言葉がよく使われる。菅直人首相も、2011年1月の施政方針演説で「熟議の国会にしよう」と呼びかけた。その仕掛人はわが畏友、鈴木寛氏（現文部科学副大臣、参議院議員）であるが、そもそもはドイツの社会学者ハーバーマスの「熟議の民主主義」がその原点である。彼は戦前のワイマール共和国を例に取りながら、ワイマール憲法下の最も民主的な手続きのなかからナチスの台頭を許したことを反省して、熟議が必要だと主張した。大衆民主主義における議会での政治的討議は、それだけでは宣伝や消費の対象にされてしまい、選挙も見世物になってしまうこと、本来、議会は大事なことを決める場だが、もう議会だけでは大事なことを決められない状況になっており、だからこそ、民主主義を複線化して、議会制民主主義を現

場での熟議で補完する必要性を指摘した。

このことは、2011年2月に行われた愛知県でのトリプル選挙後のわが国の政治情勢を言い当てているようで、何やら暗示的である。

2009年の政権交代が、国民の期待から失望、そして怒りへと変化し、政権交代そのものが民主党にとっての「坂の上の雲」だったことが明らかになってしまった。政策の方向性を、官僚との協調、社会保障と税制改革などでの「自民党化」で乗り切ろうとすればするほど、民主党政権の立ち位置は不明確となり、「何をやっても変わらない日本」という、ある種のニヒリズム（虚無主義）が国民の間に芽生えている。一方で、国民はこの閉塞感を打破する個性的で強いリーダーを渴望している。現在の何人かの自治体首長は、この条件にピッタリと合うポピュリズム（大衆扇動政治）のリーダーである。彼らは単純明快な対立軸の設定と相手への鋭い攻撃、議論の省略、まさにデマゴグ（扇動政治家）的手法で、中央の政治家以上の人気者である。

しかし、大衆扇動政治家がもてはやされる世の風潮は危険である。過去の歴史に学べば、今こそ議会政治を基盤としながら「熟議の民主主義」を実現させること、たとえばTPP（環太平洋戦略的経済連携協定）への参加など、国論を二分する国家的命題を、熟議と相手の説得により解決に導く必要がある。

哲学者プラトンは「善を目指す」ことを理想とした。「大義」の有無、その実現の「覚悟」および実現のための「戦略」……。われわれ国民や、特に政治指導者が心にとどめなければならないことである。（ますだひろや）